

人形性愛における意識と身体の関係性

中川 夏一生

(手塚 恵子ゼミ)

目次

はじめに

第1章 主題の概要と解説

第1節 本論で扱う人形の定義と概要

第2節 ピュグマリオンコンプレックス

第3節 意識と身体

第2章 近代における人形史の変遷

第1節 本論で扱う近代人形史の略説

第2節 近代人形史の変遷

第3節 近代人形史からみる「人形愛」の変遷

第1項 輸入された「人形愛」

第2項 日本の「人形愛」の確立

第3項 「人形愛」の変化と需要

第4項 現代人形観からみる「人形愛」の変化

第3章 人形における意識と身体のコミュニケーション～人形論争をめぐる～

第1節 身体の一部と人形

第2節 肉の人形

第3節 現代の価値観と人形批判

第1項 女性人形作家の台頭による変化

第2項 球体関節人形(ラブドール)と性差別

問題の関連性

第3項 「人形愛」と「人間愛」の混在

おわりに

参考文献

はじめに

人形は日本だけでなく諸外国でも人間と密接な関係を古い時代から築いてきた。それは崇拜物・玩具・芸術等といったように、様々なジャンルの物として、古くから現在まで変化をしながらも作られている。

日本において「人形」という言葉が一般的に広く使用されるようになったのは、鎌倉時代末期も

しくは室町時代初期からである。そこから250年ほど後の江戸時代になり、商業の発達に伴い、人形の商品としての需要が盛んになった。明治以降、人形は大きく変化する。今日作られている人形達は、過去に作られてきた人形達とは比べものにならないほど、精巧に作られるようになっていく。

本論では、近代の日本で急速に発展を遂げた人形文化の、近代から現代までの過程を、人形史を通して確認すると共に、その過程で起った変化や問題から、日本だけでなく諸外国でも問題となっている人形批判について考察していく。

第1章では、人形および、人形愛好家についての定義をおこなう。第2章に、近代で急速に発展した人形について年表と共に出来事を確認し、必要な事象を抜き出し考察する。第3章では、近年問題となっている人形批判を確認し、そこで起っている問題を解決する方法を、人形師や人形愛好家の人形論および、哲学者であるモーリス・メルロ・ポンティ⁽¹⁾の身体表象的アプローチから提示し、一般的な認識として扱えるように論を進めていく。

第1章 主題の概要と解説

第1節 本論で扱う人形の定義と概要

人形は有史以前から様々な形で作られ、「物」として扱われてきた。

フランス人形やアンティークドール等のオブジェ、ディムコボ人形⁽²⁾や土人形⁽³⁾・藁人形等の呪術的な人形など、それがたとえ、人形の造形が人間に似ていなかったとしても、人形は「ヒトガタ」として、人間の形を模倣したものとして、今日でも様々な用途で作られている。

人形は「ヒトガタ」であるにもかかわらず、それが物として扱われていたことには、人形の関節の動きがなかったからと考えられる。従来の人形

は関節の動きがないことで、動かないオブジェクトとして扱われてきた。それは、従来の人形に関節があったとしても可動域が狭いことや、フィギュアのように姿が固定されていたことが関係している。映画や怪談等で人形に命が宿り自ら動き出す等の例外はあるが、基本的に人形は動かない物として扱われていた。

しかし、20世紀中ごろから発展した球体関節人形⁽⁴⁾という、関節部分が球体になることによって、非常に人間と近い形で動かすことが出来るようになった。

球体関節人形とは、従来の人形とは違い関節部分が球体となっており、身体を繋ぐための糸が人形内部で結ばれている。(図1、図2参照)それが、この球体関節人形の特徴である関節部の広い可動域によって、玩具や芸術など様々な場面で幅広く使用されるようになった。

球体関節人形が関節部の広い可動域を持ったこ



図1 球体関節人形関節部の構造⁽⁵⁾

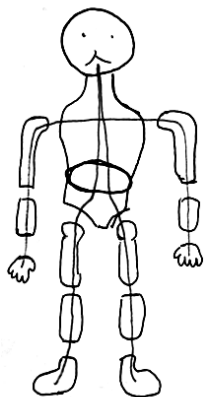


図2 球体関節人形の内部構造

とが、人形を単なる物としての扱いを受けにくくさせている要因だと考える。今までの人形では出来なかったことが球体関節人形の登場によって、可能になってしまったのである。

第2節 ピュグマリオンコンプレックス

ピュグマリオンコンプレックスとは、日本語に訳すと人形偏愛症(人形愛)のことである。ピュグマリオンコンプレックスは、ギリシャ神話のピュグマリオン伝説が基となったとされている。

ピュグマリオン伝説とは、ペーロスの息子であるピュグマリオンが、自身の作った彫刻に恋をしまい、彫刻と愛し合いたいと女神に祈ると、その彫刻にアフロディテが乗り移りガラティアとなったという話である。

この伝説が基となり、人形が好きな人間のことを精神医学では人形偏愛症と言うようになる。そして、この人形偏愛症というものは精神病の一種としての扱いを受ける。しかし、人形偏愛症は物である人形に恋をすることとして認識されているため、有史以前から人間が人形に対して持ってきた観念を変えてはいない。

近代になり、多くの人間がピュグマリオンの神話を模倣するかのように、「ヒトガタ」である人形を求めようとしている。本来であれば人間とでなければできない性行為を、人形とおこなうことのできるラブドールやダッチワイフといった人形が登場したことからも、そのことを見ることできる。

日本ではピュグマリオンコンプレックスを精神医学において人形偏愛症として定義しているが、このピュグマリオンコンプレックスを日本で初めて翻訳語として紹介したのは、日本の文芸批評家である澁澤龍彦である。

澁澤は自身の著書『少女コレクション序説』(1985年)においてピュグマリオンコンプレックスを「人形愛」という造語を用いて定義しようとした。⁽⁶⁾ 澁澤がピュグマリオンの伝説を人形に対する命を与えることではなく、物に対する愛として考え紹介した。そのため、「人形愛」に存在するのは澁澤(1985年 p19)が言うように「物体に対する嗜好」⁽⁷⁾である。つまり「人形愛」は物体である人形だからこそ成り立つとする。

澁澤は自身の造語である「人形愛」について、

『少女コレクション序説』において、次のように述べている。

人形はしばしば、人形が模倣するモデルの性質を分有すると見なされてきたのである。逆に考えれば、人形のモデルは、人形に対して加えられて虐待や愛撫を、そのまま我が身に感じるはずだった。これが呪いの原理であって、様々に複雑な儀式を伴いながらも、この原理そのものは、有史以前から古代や中世、いや、近代にいたるまでも、ほとんど変わるところがなかったのである。⁽⁸⁾

澁澤が言うように、人形に対する愛というものは愛着心なくして成り立つことはないが、それ以外にも人間には肉体に対する錯覚によって「人形愛」というものが成立する場合がある。

第3節 意識と身体

一般的な認識として身体は意識とは対となる存在として認識されているが、モーリス・メルロ＝ポンティ（1967年 p245）によると、身体とは心や意識を通して外の世界に発信するための存在である。⁽⁹⁾

身体こそが他の一切の表現空間の根源であり、表現運動そのものなのであり、意味を外部に投射しそれに1つの座を与えるもの、意味がわれわれの手元に、われわれの眼下に物のように存在しはじめるようにさせる物なのである。⁽¹⁰⁾

自身にある意識を他者へ意識を移す為には、意識を投射するための機関である身体を用いて、自身の身体から他者の身体を通じて移していくのである。

このように身体は、ただ生活を通して使用される人間の一部分ではない。身体を持つということは、私達の持つ意識を外の世界に表現する一機関として扱われることになる。それは、生命があるものでなかったとしても意識を他者に捉えさせることで、身体を通して外の世界に出された意識を、意識を向けた相手に移すこともできるのである。

生き物以外にも意識を移す事は可能である。しかし、物体でありながら「ヒトガタ」として人間と密接な関係を持つ人形に対しては、相互的な意識のやりとりができない。

人形作家の中川多里は雑誌『幽』（2016年 25号 p40）のインタビューにおいて次のように述べる。「中身が無いからこそ自分の心を反射してくれるのでしょう」⁽¹¹⁾

人形は、基本的に中身が空洞である事が多い。それは、人形自身が何も持っていない為、人間の持つ心や意識を歪めることなく、そのままの形で反射させる存在故である。人間に対して意識を移すのは、相互的なものであるが、人形に対して意識を移すのは、一方的なものでしかない。それは中川氏が言うように、人形の中身が空洞であるため、一方的に意識を送ることしか出来ないが、一方的であることがそのままの形で反射させる要因となっていると考える。

また、小説家の綾辻行人が雑誌『幽』（2016年 25号 p28）のインタビューで述べたように、「人形ってというのは基本、“虚ろ”なものだと思うんです。虚ろで空っぽだからこそ、見る物がそこに過剰な意味を読み取ろうとしてしまう。そんな触媒のような存在であるんだと思う。」⁽¹²⁾

本来、人形という物に意識や心など何も存在していない。しかし、人間は何も持たない物に意識を向けてしまう。その中でも人形は人間に似た形をしているため、他の物体よりも過剰に意識してしまおうと考えられる。この事が、国内外問わずに人形に批判をするきっかけとなったと考えることも出来るだろう。

日本の球体関節人形の祖と言われる四谷シモン⁽¹³⁾をはじめ、多くの人形作家達は、人形を空っぽな物と見せようとしている。

第2章 近代における人形史の変遷

第1節 本論で扱う近代人形史の略説

人形とは、古くは古代から様々な形で作られ使用されてきた。しかし、近代から現代にかけて急激に人形に対する思想や意識が大きく変化してきた。

本論では関節球体型の人形を主に扱うが、近代に入ってからの人形の系譜を確認することで、ど

のような時代背景の元で、人形師が作る人形や市販の人形など様々な人形が変化していったのかを確認する。

しかし、人形史すべてを記載することは私にはできない。本論ではすべてを記載することが重要ではないため、人形史に関する文献から必要とされる事項を抜き出して年表にする。また、年表を作成する上で、人形に関する出来事と同年代に起こった出来事などを記載することで、人形に関する変化の背景を明確化する。同年代の大きな出来事と同じく人形史に影響を与えてきたものも同時に記載する。

第2節 近代人形史の変遷

近代の人形の歴史の中で、のちに登場するドイツの球体関節人形作家のハンス・ベルメール⁽¹⁴⁾を外すことはできない。

ベルメールは人形の体の隅々までをアナグラムし、それを組み替えてまた別の人形を作り上げている。人形をアナグラム化と言うことは、人形の身体を分解し、分解された身体を違う形で再構築していくことである。1章2節の図3⁽¹⁵⁾にあるベルメールの作品を見ると女性の下半身のみがつなぎ合わされている。ベルメールは、女性の身体への探究心によって、身体を分解し再構築することで、究極の女性の美しさを、人間の形をした立体的な身体を持つ人形によって表わした。

1900年になるとパリ万博が開かれ、そこで人形に関連する知識や作品が多く輸入されるようになる。特に大きかったものとして、ディスプレイ人形を作成し始めたことである。後の日英博覧会などでも日本が等身大人形の作成に成功をおさめ、当時の博覧会において注目を集める事となる。その後、日本ではフランスより蠟製のマネキンを輸入することにより、ディスプレイ人形からマネキンへと移行していくことになる。⁽¹⁶⁾

さらに1925年になると国内マネキン企業の島津マネキンができることになる。またそれに合わせてマネキンのフォルムも全く新しいものが登場した。今までであれば蠟で作成されていたものが、堅牢なカルトンという素材で作成されるようになる。

昭和になると旧人形などが売れなくなり人形職人たちが新たな人形の研究をし始める。それによ

り、日本に多くの人形店が出店され始める。しかし、状況が打開されたわけではなかった。

1930年になると、竹久夢二⁽¹⁷⁾が登場し、また山田徳兵衛⁽¹⁸⁾が一般の人形作品などを取り扱った人形展を開催することでアマチュア人形作家の作品にも注目が集まるようになる。また、同時期に海外では人間を戯画化したマネキンによる作品が流行し始める。このころより人形愛好家やアマチュア人形作家などが日本人形作品の発展に向けて、人々が組織し始めることになる。しかし、この同時期に世界大戦が行われていたため様々な制限が存在していたため、戦後までは大きな進展は見られなかった。

1933年にドイツにおいて、ヒトラーを擁するナチスが政権を獲得し、これに対して人形師ハンス・ベルメールはナチズムに反対するために様々な創作物を作成する。また、この頃からハンス・ベルメールが人形制作に着手し始め、1937年に球体関節人形で作品を作成する。

戦後すぐにぬいぐるみ文化等が大幅に発展し、その中でもミルクのみ人形が大流行する。ミルクのみ人形は良妻賢母としての役割を学ぶことができるものとして広く認識されていた。

戦後の1946年に朝日新聞が主催で現代人形美術展が開催され、アマチュア人形作家等といった人形作家たちに注目が集まり始まる。(1968年まで開催される)⁽¹⁹⁾

1959年になると、今まで輸入をしていたバービー人形を日本で製造することになり、バービー人形が流行する。

翌年の1960年に雑誌『太陽』が刊行され、四谷シモンをはじめとした人形作家などの作品などが多く掲載されることになる。⁽²⁰⁾

1964年に放映された「ひょっこりひょうたん島」が放映される。これにより人形文化が老若男女問わず広がるきっかけになる。そして人形劇が日本で広く知られることとなる。

1965年に初めて澁澤龍彦や瀧口修造達により、ハンス・ベルメールの人形作品集などが日本で紹介される。このベルメールの人形は、人形に対して求めるものが日本で少しずつ変化するきっかけになった。日本の球体人形作家でベルメールの人形作品に感銘を受けたのが四谷シモンである。

人形性愛における意識と身体の関係性

1967年に四谷シモンが金子国義を通じて澁澤龍彦に会う。澁澤龍彦との出会いが四谷シモンの今後の作品に大きく影響を与えている。

1968年になると、人形制作にも大きく変化が訪れる。人形作成に使用される素材が変わりFRP（繊維強化プラスチック）⁽²¹⁾が使用され始める。

1969年になると、日本で初めて本格的な球体関節人形が土井典の手で作成される。⁽²²⁾ここで作られた球体関節人形は、バルメールの模倣であったと言われている。また、同時期にリカちゃん人形が登場し爆発的な人気を呼ぶこととなる。

1972年になると写真家の吉田良⁽²³⁾が登場し、今までになかった人形の見せ方を披露する。同時期に、四谷シモンが従来の着せ替え人形のような存在としてではなく人形を「イメージ化された身体」として、人形が多様な意味で「動く」ように見せる表現法を使用するようになる。ここから今までよりも、ハンス・バルメールの影響の色濃く出ている作品が増えてくる。

1970年以降から人形が様々な場面で登場するようになる。このきっかけとして考えられるのは、人形制作に使う素材の種類が増えたことや、脳科学の分野が発達し、人間をモルモットとして扱う場面が世界中で出てきたことが原因ではないかと考える。⁽²⁴⁾

1977年には、オリエント工業による障害者の購買を想定したウレタン式ダッチワイフを発売する。従来のダッチワイフよりも腰回りの強度を強めたことで、他の製品で起った破裂事故を減らすことには成功した。⁽²⁵⁾

1978年には、四谷シモンにより国内初の球体関節人形教室を開かれる。それと同じくして、球体関節人形などを多く取り扱っている雑誌『夜想』が刊行される。これにより、球体関節人形が世間に知れ渡るきっかけになる。

1979年に女性差別撤廃条約が制定され、翌年には日本で今も活躍する人形作家に大きく影響を与えた女性人形作家である恋月姫⁽²⁶⁾・天野可淡⁽²⁷⁾・秋山まほこ・堀佳子の四名が登場する。彼女らが登場したことにより、日本の球体関節人形作品に大きな変革がもたらされることになる。1981年に一年遅れで、女性球体関節人形作家である大竹京

が登場する。大竹の手がける作品は日本国内で最も美しい球体関節人形として有名であり、球体関節人形において極限まで人間の美しさを際立たせることができる作家として名をはせている。

この二年間に登場した人形作家は、日本の球体関節人形作品の形を固定してしまったとみることもできる。

これ以降の人形作家達の多くは、彼女たちの枠から抜け出せていない。

1983年に吉田良が開いた人形教室には多くの生徒が集まり、現在でも活躍する有名な球体関節人形作家達を多く輩出することとなる。吉田良が人形教室を開いたことにより、人形作家における新世代を登場させるきっかけになる。

1987年に澁澤龍彦が死去し、四谷シモンが翌年「天使 - 澁澤龍彦に捧ぐ」を作成する。澁澤の死は人形作家達だけでなく、文豪などからも惜しまれた。澁澤が日本の人業界に残したものは大きく、現在にも澁澤の人形観は人形愛好家達の指標となっている。

1990年の子どもの権利に関する条約が制定され、この9年後に制定される児童ポルノ法へと発展していく条約となる。

1994年に当時アメリカで大流行していたラブドール会社のリアルドールの商品が日本で人気を呼び、日本のラブドール会社に変化をもたらすきっかけになる。また、この2年後には、日本で初めてのラブドール専門の風俗店が東京に登場し人気を呼ぶ。

1997年に村上隆によるアニメ風フィギュア「HIROPON」⁽²⁸⁾と「My Lonesome Cowboy」⁽²⁹⁾の登場により、日本国内でアニメ風フィギュアの数が増え始めることとなる。それにより、人形作品にアニメ調の作品も登場し始める。

1998年にボックス社の手がける「スーパードルフィー」が登場する。「スーパードルフィー」の登場により、球体関節人形の認知度が大きくなる。また、ドールブームを引き起こす契機となった。

1999年になるとボックス社によって従来の球体関節を用いた人形の「スーパードルフィー」が発売される。さらにこの4年後の2003年になると内部フレーム構造による「ドルフィードリーム」が発売される。⁽³⁰⁾

1999年に日本で児童ポルノ法が制定され、2015年の改定を経たことにより人間の児童に見える物への規制も行われることとなり、幼児型ラブドールへの批判が相次ぐこととなる。

2000年には女性人形作家である三浦悦子が登場し、今までにはないアートのかつサディスティックな表現が人気を呼ぶ。この表現はハンス・ベルメールを彷彿とさせることとなる。⁽³¹⁾

2001年にはダッチワイフの素材に変化が訪れ、従来のダッチワイフに使用していたウレタン式からシリコン⁽³²⁾式に変化する。これにより質感に大きな変化があり、より人間の感触に近づいた。これはラブドールや球体関節人形等にも流用され、現在も人気の素材であり、高級人形等に多く使われている。

2002年に女性人形作家の清水真理が登場し、天野可淡や恋月姫とは違った観点から人形へのメルヘンさやかわいらしさを表現し、若い女性からの絶大な人気を誇る。また、清水真理は従来の人形展示のみならず、様々な業界に作品を提供しており、これによって球体関節人形の表現の場や認知する人が多くなることになった。

2003年になるとラブドールに球体関節を用いた商品が登場し、従来の商品よりも人気が出ることになる。また、これによってラブドールを使用したアート作品なども登場しており、ただ単に愛玩用ではなく観賞用や撮影の被写体としても使用されることになる。

2004年に四谷シモンの過去の作品を展示する場として、香川県にある鎌田醤油の社長元宅（淡翁荘）⁽³³⁾が開設される。戦前のモダニズムの建物にシモン独特の人形ワールドが溶け込んでおり、シモンの人形作品を生かすように展示されている。

また、映画「イノセンス」でハンス・ベルメールの人形作品が登場し、これが反響を呼ぶ。しかし、これはハンス・ベルメールの制作思考に沿った登場の仕方ではなく、ホラー的要素の一環として登場している。また、「イノセンス」は展示会などを開催したため、ベルメールを認知する人が増えた。

2005年にはFRPを改良したストーンファイバー素材の球体関節人形が登場する。ここには、

球体関節人形とビスクドールの両面を併せ持つ人形が制作されることとなる。しかし、球体関節人形の特徴でもある可動域が極端に狭くなったことと、もろかったため人形作家の中で好んで制作する人は少なかった。

2006年になると人形展示会などを主に行うための場所として「夜想」という展示会場ができ、有名な人形作家からアマチュアの作家までが展示することができる場所が創られる。

2007年にシームレス・ドール・メーカーのアルテトキオが設立される。

2008年に田中圭子氏が『日本における球体関節人形の系譜』を発表し、日本における球体関節人形作品の系譜や人形師の変遷を明らかにした。

2010年には球体関節人形作家の中川多理が登場し、これまでの人形作家とは違った形で人形を美しくかつ幻想的に表現した。中川の作品は、まるでファンタジーの世界からそのまま飛び出てきたかのような美しさを持っている。

この頃より、中国国内でラブドール事業が活発化し、日本よりも大きく発展し低価格かつ高品質の商品を多数販売される。これにより、2018年には日本のラブドールメーカーを抜いて中国が世界のトップシェアになる。その一番の要因は安価であることであろう。さらに、IT大国ならではの技術を使用し、AIを搭載したラブドールも日本よりも安価で買うことができる。中華製のラブドール等の素材は日本で使用されているようなシリコンなどではなく、TPEというプラスチックとゴムでできた安価かつ耐久性のある素材のため、低価格で販売することができる。また、中国で開発されたAIを搭載したラブドールは日本には未だ無い技術であり、このAI技術によって人形に本来できなかった対話や自立した行動などができるようになった。人形の一線を越えてしまったという見方をすることができよう。

また、2010年代からはアメリカが発端となり、世界中で幼児型ラブドール（成人のラブドールに関しての批判も同様にあり）を批判の対象とした、署名活動や反対運動などが活発化している。日本でも約1800人の人たちが反対活動の署名にサインをしている他、SNSなどでは論争が起こり、問題視されている。⁽³⁴⁾

2015年に日本で児童ポルノ法の改定により、児童ポルノに関する物の所持に関しても処罰の対象となるようになり、人形師の表現の場や幼児型人形の商用化が狭められた。また、児童ポルノ法が改訂された要因として、このような児童型人形の種類が増え、安価で手に入れることもできるようになったことも要因としてあげられる。

2016年にオリエント工業がラブドール業界初の血管メイクを施したラブドールが作成し販売する。この後すぐに他の企業のラブドールにも血管メイクを施した商品を開発し販売する。また、2018年には骨格入りラブドールが発展し、完全自立型のラブドールまで作成されるようになる。中国のラブドールメーカーの多くが様々なラブドールの形を模索し始め、日本に全くないラブドールが多く登場する。

2020年ではオリエント工業が完全受注制のオーダーメイド頭部を行い、業界からだけでなく人形作家からも注目を集めることになる。⁽³⁵⁾

以上の出来事をわかりやすく記載するために、下記に年表にしてまとめることとする。そして、重要な出来事は本章の終わりにまとめる。(年表は次ページに掲載)



図3 ハンスベルメール
球体関節人形作品
「La Poupée」1939年



図4
一般的なマネキン

が流行した要因として、澁澤や滝口修造⁽³⁶⁾によって、ベルメールの作品を輸入したことから始まる。

ベルメールの制作した作品は、どれもが人形とは思えないような形をしている。それは、人形の身体のパーツひとつひとつにある意味をアナグラム化し、組み替えた新しい意味を持った人形を作るからである。この人形とは思えない形は、女性の肉体の美しさを究極の物にするため、容易に身体を組み替えることのできる人形によって行われた。作り替えられた人形の肉体が、後の澁澤や四谷のような日本の球体関節人形黎明期の人物に大きな影響を与えることとなる。

ここで気をつけなければならないことは、ベルメールの人形を解釈するには、身体に含まれた意味を読み解くための知識が必要となるという点である。そのため、一般的にベルメールの人形を理解する人間は多くない。それは、人形に関心を持たない人だけでなく、現在の球体関節人形作家にも同じ事が言える。

このような事情から、ベルメールの人形作品がホラー映画やホラーゲーム等で使用されたことによって、一般的な観点ではホラー的なものとしての認識されることとなる。それだけでなく、ホラー作品に扱われるようになったのは、このベルメールの人形作品の表象によるものであろう。ベルメールの作品は人形の身体をバラして組み替えた物であるため、猟奇的な表現と受け取ることが出来る。

しかしながらベルメールの人形作品において、人形に対して生ある存在として捉えることができないのは、人形の表面上だけなのである。ベルメールによって作成された人形というものは猟奇的な表現なのではなく、先述したように、身体をアナグラム化させて一つ一つの身体に意味を持たせて様々に変化させたものなのである。

人間のエロティックな解剖学的可能性を、快楽原則によって再構成することが、ともするとベルメールのひそかな野心だったのかもしれない。そのために、ありとあらゆる肉体の変形に適応するような、理想的なファンム・オブジェとしての人形が要求されたのであろう。ベルメールの人形哲学によれば、女性の

第3節 近代人形史からみる「人形愛」の変遷 第1項 輸入された「人形愛」

日本における球体関節人形の歴史を語る上で、澁澤龍彦とハンス・ベルメールは無視しては通ることが出来ない存在である。日本で球体関節人形

表1 年表1

西暦	人形の歴史	同年代の出来事
1857年	日本で初めて言語の人形化が行われた。	松下村塾が開塾。
1900年	ディズレーイ人形の登場。 パリ万博でビュール・イマン「解剖学的蠟製上半身像」を発表	パリ万博が開催。
1911年	フランスより蠟製マネキンの輸入。	日本でフランス映画が大ヒットする。
1925年	国内マネキン企業の島津マネキンができる。 初のマネキン人形が登場。	日ソ基本条約締結
1928年	離人形師や御所人形師らの職人が新時代人形の研究を始める。 日本に人形店が多くでき始める。	昭和天皇即位 張作霖爆殺事件
1930年	竹久夢二の人形が初めて展覧会を開催する。 人形問屋の山田徳兵衛が人形師のみならず一般の人形作品などを取り扱った人形展を開催する。 海外では人間を戯画化したマネキンなどが流行。	昭和三島金輸出自由化
1931年		満州事変
1932年	中原順一がフランス人形展を開催する。	大森殺猪殺事件が起こる。
1933年	人形愛好家やアマチュア人形作家、業界関係者等が日本人形作品の発展や向上に向けて組	ヒトラーが政権獲得。 日本が国際連盟を脱退。
1936年		二・二六事件が起こる。
1937年	ハンス・ベルメールの球体関節人形制作が始まる。	日独伊防共協定
1939年		第二次世界大戦
1940年		日独伊三国同盟
1941年		真珠湾攻撃 太平洋戦争
1942年		ミッドウェー海戦
1945年	戦後から、ぬいぐるみ文化等が大幅に発展していく。(ミルクのみ人形が流行)	終戦。
1946年	朝日新聞主催の現代人形美術展が開催される。(1968年まで開催される。)	昭和天皇による人間宣言
1948年		優生保護法が制定。
1949年		ロボトミー手術によってアントニオ・エガス・モニスがノーベル医学賞を受賞。
1950年		朝鮮戦争勃発 これにより日本は高度経済成長期になる。

表3 年表3

1980年	天野汗の登場。 恋月姫の登場。 秋山まほの登場 堀佳子の登場	イラク・イラン戦争が始まる 日本の車両生産台数が世界1位になる。 人間の脳波に関する技術がここからより飛躍的に発展する。
1981年	大竹京の登場。	ローマ法王来日
1983年	吉田良が人形教室が開き、現在も第一線で活躍するような人形師を多く輩出している。	インターネットが誕生する
1987年	濫澤龍彦死去。それにより四谷シモンが習生。「天使-濫澤龍彦に捧ぐ」を制作する。	ブラックマンデーにより世界の株式市場大暴落
1989年	大竹京が吉田良に師事する。	平成に改元される。 出生率が1.57まで下がり少子化問題が懸念されるようになる。
1990年		憲法学者の佐藤幸治による「人権」に関する国際問題についての見解が著書『憲法』で書かれる。 子供の権利条約が制定される。
1993年		EU発足
1994年	アメリカのリアルドールが日本でも人気になる。	リレハンメルオリンピック開催
1996年	東京で日本初のラブドール専門の風俗店が登場。	アトランタオリンピック開催 ドロシー羊のドリーが誕生する。 「HIV/AIDSと人権国際ガイドライン」が制定される。
1997年	村上隆によるアニメ風フィギュア「HIROPON」が発表され5000万円で落札される。	日本で「臨床実験に関する法令」が制定される。これにより脳死判定された場合に心臓、肝臓、肺、腎臓、脾臓、小腸などの移植が法律上可能になる。
1998年	ボークス社の手掛けるスーパードールフィーが登場。 大野季楽の登場。 村上隆のアニメ風フィギュア「My Lonesome Cowboy」が発表され1.6億円で落札される。	X JAPANのhideが死去
1999年		男女共同参画社会法が制定。 児童ポルノ法が制定。
2000年	三浦悦子の登場により球体人形のアートの表現方法が多くなり始める。	プレステーション2が発売される。 ハノーヴァー万国博覧会

表2 年表2

1956年		日ソ共同宣言
1959年	バービー人形が日本で製造される。	キューバ革命がおこる。
1960年	雑誌『太陽』の発売	ローマオリンピック開催
1964年	ひよっこひょうたん島が放映される。	東京オリンピック開催 ニューヨーク万国博覧会 スペインの医師であるホセ・デルガドが牛を使用して脳科学の実験を行った。
1965年	濫澤龍彦や瀧口修造たちによりハンス・ベルメールの人形作品が紹介され、日本で少しずつ人形に対する価値観が変わり始める。	ベトナム戦争
1966年		「経済的、社会的及び文化的権利に関する国際規約」と「市民的及び政治的権利に関する国際規約」が制定される。
1967年	金子国義を通じて濫澤龍彦と四谷シモンが出会う。	東南アジア諸国連合 (ASEAN) 結成 モントリオール万国博覧会
1968年	マネキン風等身大少女人形が作られる。 このころよりラブドール等FRP(繊維強化プラスチック)が使用され始める。	キング牧師暗殺
1969年	日本に初めて本格の球体関節人形が土井典により製作された。 リカちゃん人形の登場。	アポロ11号が人類初の月着陸
1970年		三島事件 このころに生理学者のベンヤミン・リベットが脳神経による、人間の意識の問題についての実験を行う。日本では、2005年に翻訳される。
1972年	吉田良の登場。 四谷シモンの人形制作に対する目的が元来の服を着せて完成という従来の人形から「イメージとしての身体」という表現に変化していく。この変化にはハンス・ベルメールの影響が色濃く出ている。	沖縄復帰
1973年		石油危機
1975年		神宮国際海洋博覧会
1977年	オリエント工業が障碍者の購買を想定したラブレックスタッチワフを発表。	ロンドンで第3回サミット開催
1978年	四谷シモンが国内初の球体関節人形教室を開く。 雑誌『夜想』が刊行される。	日中平和友好条約
1979年		第二次石油危機 ラジカセが日本で大流行 女性差別撤廃条約が制定。

表4 年表4

2001年	シリコン式のタッチワフが初めて登場する。 土谷寛桃(つちやかなび)の登場	同時多発テロがおこる。
2002年	清水良理の登場。 リアルラブドール専門店4woodが登場。	欧州連合がユーロを流通開始した。
2003年	ラブドールで球体関節を用いた商品の登場。 中国でラブドール製造会社Rabudo11が創設される。	SARSが流行する。
2004年	四谷シモンが人形館を建てる。 映画「イノセンス」公開 植宮サイの登場	マーク・ザッカーバーグがSNSのFacebookを創設。
2005年	FRPを改良したストーンファイバー素材のビスクドールと球体関節の両面を併せ持つ人形の登場。しかし、可動する範囲が狭く非常にもろいためあまり作る人は少なかった。 エリザベト・アレクサンドル『人形と人間』が発表される。	ローマ教皇ヨハネ・パウロ2世が死去。 日本国際博覧会
2006年	人形展示会などが主に行われる「夜想」という展示会場ができる。	SonyからPS3が発売される。
2007年	シームレス・ドール・メーカーのアルテキオが創業。	VOCALOIDの初音ミクが発売される。
2008年	田中圭子が論文『日本における球体関節人形の系譜』を発表。	北京オリンピック開催。
2010年	中川多理の登場。(吉田良に師事していた)中国でのラブドール事業が活発化し始める。 アメリカで起こった児童型セックスドールの生産・販売等を反対する運動が、世界中で巻き起こる。	上海国際博覧会が開催
2011年		東日本大震災
2015年		児童ポルノ法改訂に伴い児童ポルノに関する物の所持も規制される。
2016年	オリエント工業が業界初の人形に血管を施した。この血管を施す技術は中国のラブドールなどにも多く使用されている。	ブラク・オバマ大統領がアメリカ大統領初訪の広島訪問を訪問する。
2018年	ラブドール製造において中国がものすごい勢いで発展する。これにより、世界中のマーケットでの主流が中国製品となりつつある。骨格入りのラブドールが発展し、自立することができるようになった。 金森修の著作である『人形論』を発表。	パリで行われた博覧会国際事務局の総会において2025年に大阪で万博を開催することが決定した。
2020年	オリエント工業が完全受注製のオーダーメイド頭部を開始する。	新型コロナウイルスが世界中で蔓延。

(年表 筆者作製)

各部分は転換可能なのである。新しい性感帯を探求するために、その顔や手足や下半身を別の秩序に並べ替えて、ベルメールは一つの肉体から、無限に複雑な存在の可能性を引き出すのである。⁽³⁷⁾

澁澤の言うように、人形をアナグラム化することは、人形の特性を利用して、身体や意識さえも分解し再構築することである。

ベルメールがなぜここまで人形へ執着するのか。それは、人形を作る上で人形の体という物は、人間の肉体とは異なった素材でできている。これは人間の肉体は大きく形を変えることはできないが、球体関節人形であれば人間とは違い容易にその姿を変えることができるからである。

第2項 日本の「人形愛」の確立

ベルメールの作品等を日本に輸入した澁澤は、ベルメールの独特の人形観を多く解説している。しかし、澁澤の人形に対する考えは、ベルメールの人形に対する思考をそのまま継承したわけではない。澁澤は、ベルメールの人形観を広めると同時に、芸術の観点とは異なる、精神医学や心理学の視点から、日本における人形観を「人形愛」という新造語によって作り上げようとした。澁澤が作り上げた「人形愛」は、物体愛およびコレクション欲に由来する。つまり、ベルメールのいう女性の肉体や性感帯の探求を目的とする「人形愛」ではなく、人形という物体に対しての欲情である。澁澤は「少女コレクション序説」（1985年）において述べたように、人間が考える理想の肉体や願望された肉体を現実にある人形の肉体に当てはめることで、物である人形を完成された肉体として捉えた。⁽³⁸⁾

澁澤が「人形愛」に存在しているのは、「物体に対する嗜好」とであるというように、物である人形が内包しているものが人間のコレクション欲に近いものであるとして扱った。それは、物体である人形だからこそ成り立つのである。

この澁澤が作り上げた「人形愛」が現代でも見受けられるのは、四谷シモンをはじめとした人形作家や人形愛好家に少なからず影響を与えたからではないだろうか。

第3項 「人形愛」の変化と需要

現代の球体関節人形を語るうえで欠かせないのは四谷シモン、吉田良、恋月姫、天野可淡の四人である。この四名が、今まで日本にはなかった球体関節人形における表現方法をそれぞれ独自に編み出した。この四名なくして球体関節人形はいまだにアンダーグラウンドな文化のままであったと考えられる。

先述の4人の球体関節人形作家が登場した後に出てきた作家達は、この4名に影響を大きく受けたために、80年代以降に作家の急増やジャンルの多様化がおこったと考えることができる。

また、1980年代以降、人形作家によって急激に作品の多様化がおこったのは、女性差別問題が国際的に解放に向かったことで、女性が活躍しやすい社会になったことが関係している。その最たる例として、1979年の女性差別撤廃条約が制定された翌年に、日本では女性の球体関節人形作家が4人も登場したことが挙げられる。これが契機となり、女性の人形作家が数多く登場することとなる。近年は女性人形作家の作品が主流になりつつある。

日本の球体関節人形の祖とされる四谷シモンは、ベルメールや澁澤の影響を受けた作品を多く作る。四谷シモンの作品には、この二名の影響が色濃く出ている。四谷の人形の特徴としては、球体関節人形で作っているにもかかわらず、作った作品を箱に入れて飾られている状態が多いことであろう。それは、四谷が作る人形は完成した時点で、最高のポーズに最高の表情等、人形のすべてが完璧になった状態である。そのため、球体関節人形であるにもかかわらず動かさない方が、かえって自然な状態であると考えられる。四谷の人形を展示している淡翁荘も、完成された人形を入れるための箱として使用しているのではと考えられている。

また、四谷の作る人形は、人形の造形の美しさを求めることは人形師として考えてはいるが、それ以上に、「人形に何を求めるか」と追及し続ける精神的な問題を求めている。それらを踏まえて作品を見ることで、四谷の作った人形は輸入された「人形愛」と澁澤が大成した「人形愛」の両方を見ることが出来る。

澁澤が四谷に言った、人形を作るという行為にエロティシズムのようなものが含まれているということに、四谷は感銘を受け、人形を作る過程にナルティシズムが見受けられると考え、人形制作を行った。

四谷の作る作品の特徴としては、人形の関節部分やつなぎ目を見せることで人形の動きという物を意識させようとしている。

四谷の次に登場する吉田良は、ベルメールや澁澤の影響が余り感じることができない。これは天野可淡という女性作家と共同で作った事が多いという点が大きいのではないかと考える。

天野可淡が求めた人形の感情は、その作品を見ると理解できる。天野は今まで注目されて来なかった人形に感情を持たせる事に注目をした作品や、人形の亜人化（亜人形化）といった、人形でありながら「ヒトガタ」ではない作品を多く作る。そして、写真家でもある吉田によってこの人形の世界観を完成させる。可淡ドールは今でも多くの人気を集めており、その要因としては天野の作品の全く新しい人形と、吉田によって撮られた画像の中の平面化された人形が組み合わせられているからであろう。天野と吉田の2名がいたことにより、物体愛だけではなく、人形の造形への愛といった新たな「人形愛」の形ができる。現在活躍する若手人形作家の多くは吉田良の人形教室出身の人物が多い。

天野とほぼ同時期に登場する恋月姫は、天野とは違い人形はかわいくなければならないという観点から作品を作っている。そこで、球体関節人形でありながら、フランス人形やアンティークドールのような作品を作る。そこにはビスクドールの手法を用いて作品を作っている事も関係している。『震える眼蓋』（2000年）や『人形月』（2006年）等多数の作品集のなかで、人形が何かに寄り添っている様や眼を閉じて死人としたような印象を見ることが出来る。これらを強調するアンティークドールのような服装などがこの恋月姫の作品から見ることが出来る。恋月姫がこのような手法を用いたのは、人形を可愛がるだけでなく、オブジェとして扱うために作っていると考えられる。恋月姫も天野と同様に物体愛だけでない人形の美しさを求めたからではないだろうか。

吉田や天野、恋月姫らが作り上げた新しい「人形愛」にも、澁澤が『少女コレクション序説』（1985年）で定義したコレクション欲⁽³⁹⁾の影響の片鱗が見受けられる。それは、澁澤によって確立された「人形愛」が、人間が持つ「人形愛」の核心を突いているからではないかと考える。

第4項 現代人形観からみる「人形愛」の変化

球体関節人形においてファッション性が高まったのは、女性人形作家が登場してからのことである。人形に衣服を着せることはファッション性を高めるだけでなく、人形の隠された部分の身体を想像させることも目的としている。

天野可淡や三浦悦子、女性ではないが吉田良なども行った見せ方に、胸の部分のみ衣服を着せていない（または、透けている）状態等の人形がある。ここから見て取れるように、隠れていない部分だけは現実の物として見る事ができるが、それ以外の部分は隠されているため、イメージの中でしか身体を見ることができない。

四谷やベルメールが求めた「人形愛」とは違い、人形をかわいくするための衣服と衣服によって隠れた部分をイメージさせることが、現代の人形作家が憧れた人形であると考えられる事が出来る。

しかし、身体をイメージさせるものとして使われた衣服は、一般的にみると単なる着せ替え人形として見えてしまう。

現代の人形作家の特徴として、四谷や吉田、天野、恋月姫の4人の影響を受けたいうえでオリジナリティを出している作品が多く存在するが、澁澤龍彦や四谷シモンなどが影響を受けたハンス・ベルメールの影響を受けた人というものは、ほとんどいない。

第2章を通してみてきたように、近代の人形から現代の人形にいたるまで、「人形愛」に対する目的が大きく変化している。ベルメールの作品が輸入されてからの「人形愛」は、人形の持つ肉体に対して性的要素を求めることが主流であったため、人形に服を着せかわいらしく着飾らせるよりも、裸体で人形の継ぎ目などを見せ無機物的な要素を踏まえつつも、肉体に孕む性的要素を見せることが目的であった。しかし現代になり、人形を着飾ることで、肉体の見えない部分へのフェティシズ

人形性愛における意識と身体の関係性

ムを求め、そして見えない部分をイメージすることが「人形愛」として、大きな役割を担っているとする。衣服によって分断された身体は、意識された肉体として人間の意識の内に反映される。

この目的の変更というのは、ある種で澁澤が望んだものなのかもしれない。それは澁澤の望む「人形愛」が、物体である人形に様々な性的要素を封じ込めてこそ、完成された人形コレクションとして扱うことができるものだからだ。

年表で見てきたように、人間が人形に求めたものは、人形師が代弁した人形として作り上げる。さらに、人間が欲した物を企業が商品として提供していく。このことで人間の物体に対する欲求を満たしていくのだ。

そして、このこと自体が問題となり、現代において人形に対しての批判を生み出すきっかけとなるのである。

第3章 人形における意識と身体のコミュニケーション ～人形論争めぐって～

第1節 身体の部位と人形

人間の外と中を分ける境界はモーリス・メルロ・ポンティ（1967年 p172）が言うように身体と考えられているが、人間の身体という境界からは様々な物がはみ出している。⁽⁴⁰⁾

このことを田中雅一（2017年 p21）が次のように述べている。

身体はさまざまな形で、自身の皮膚や粘膜で覆われた境界からはみ出ている。たとえば毛髪や体毛、汗や血液、唾液などの分泌物、糞尿や経血、さらには体臭や声、ときにはウイルスなど、身体の境界を簡単に越える「身体的なもの」は数多い。⁽⁴¹⁾

人形に関しても同様のことが言えると考えられる。人形において、身体の境界を表すことができるものと大きく変わることはない。様々な人形がある中で、はみ出す物があまりないということが示すように、人形の身体の境界からはみ出している物は人間ほど多くはない。それは、人形の中身

が空っぽであるという事が関係している。

身体境界を取り外しの出来る身体によって曖昧にすることで、はみ出してくる物が少なくとも、人形から受け取る物を少なく感じ取ることがない。

人間であれば身体は一カ所にまとまり、そのひとつの中から複数のはみ出るのであるが、人形はひとつにまとまった状態から、はみ出す物が限られているため、一つ一つの身体をバラして多くの物を境界から出そうとしている。それは、人間が望む身体のためなのかもしれない。

第2節 肉の人形

現代は技術が日々進化しており、最先端技術によって望むべき姿が、簡単に手にすることができるようになった。それは美容整形や骨延長手術、豊胸手術などいくつかある。願望した肉体への飽くことなき欲求こそがこれらを生み出したのであるが、人形はこのような技術が無かったとしても、望むべき肉体を手に入れることができる。それは人形が人間の形をしながらも、人間とは違い物体である事がこれらを成り立たせている。

このことは金森修（2018年 p134）が次のように述べている。

人形制作は現代にも存続する唯一の錬金術ではないか、と付言する。かくして、腐敗しないしたい、永遠に死に続ける存在は、永遠の命の探求した過去の夢想的実験群と連結されるのだ。⁽⁴²⁾

人間には球体関節人形のように簡単には手や足を取り外すことはできない。しかし、人形であれば身体を容易に取り外すことができ、理想の望むべき身体パーツを取り付けることもできる。

人形が人間の願望の詰まった存在として現代では様々な創作が行われている。人間が望む姿を、人形が人間の代わりとなって役割を果たし、そのために人形は人間の手で今も作られている。

人形を作るのに使われる素材には何があるのか。藁人形であれば藁が使用され、フランス人形は粘土や石が使用され、ラブドールはシリコンやプラスチックが主に使用される。シリコンやプラスチック等を除けば基本的に人形を作る際に

使用されるものは、自然界に存在するようなものばかりである。

人形は「人の形」と書くにもかかわらず、人間と同じ肉体を持つことはない。当然のことながら人間の肉体や皮膚から剥がして人形に使用したとしても、犯罪として扱われる。そのために、人形をより人間の感触に近づけるために、自然界にない素材をいくつか造り、人形の肉体として使用するのである。

肉体だけでなく人形は臓器を持っていない。人形が臓器を持っていないのは、誰もが知っている。しかし、現代の人形師達の中には臓器の模倣したものを持たせた人形を作る。この人形達は内臓すべてではなく、一部の臓器から他の臓器などを連想させることや、生ある人形と見せようとする。

現在では、このような人間によく似せて作られた精巧な人形達が批判的となっている。

第3節 現代の価値観と人形批判

第1項 女性人形作家の台頭による変化

年表などにも登場したように人形に対する批判は、現代にいたってから起こったものである。(過去に起こった人形批判は大きく取り上げられず、大きな問題になることはなかった。)人形批判が起こる前には、人権問題や奴隷問題等、人間に対する差別についての批判が行われていた。

特に現代では、女性差別問題と児童性被害問題の二つがとりわけ注目されている。女性差別問題に関しては1979年の「女性差別撤廃条約」が制定され、女性に対する人権運動が世界中で巻き起こる。女性差別問題が解決に向うにつれて、女性が社会に与える影響も大きくなることとなる。日本でのよい例が、女性人形作家が台頭し日本の人形界を牽引する存在となったことだ。このことがきっかけで、日本の有名人形作家の多くは女性が占めるようになった。また、これらからの女性人形作家達が作る作品は、国内のみならず世界中から注目されることとなった。このように国外からも注目されることにより、国内でも球体関節人形等の精巧なドールが普及していくこととなる。

これら女性人形作家は、女性の肉体をあらわにした人形を作りはじめた。そして、女性人形作家達によって作られた女性の裸体が露わになった人

形達が、女性差別を問題とする人たちから批判されることになった。これらの批判は、第3波フェミニズムの流れをくんだような人たちが、人形作品に対してではなく、作品を作った女性人形作家に対して、ジェンダー問題の軽視や女性差別問題の再興につながるとするものであった。またこれらの批判は、SNSや口コミ等で行われた。さらに、女性人形作家だけでなく、人形愛好家やそれを擁護する人にまでこれらの批判が及ぶこととなる。

第2項 球体関節人形(ラブドール)と性差別問題の関連性

球体関節人形やラブドール等の登場により、人形で性的欲求を果たすことが可能になり、それが性差別や性虐待と結びつき様々な問題を引き起こすことになる。

第2章の第2項でも述べたように、2010年頃からアメリカが発端となり、「Ban Child Sex Dolls」という署名サイトにおいて現在183944人の署名が集まっている(最終アクセス2020年12月23日0:40)。世界中で注目を浴びている幼児型ラブドール批判であるが、これに合わせラブドールを批判する声が集まっている。

このことは日本にも大きく影響を及ぼしてきており、インターネットやSNSを通じて署名活動や反対声明などが大体的に表明されている。Change.orgの「幼児型セックスドールの生産・販売・の廃止を求めます。」⁽⁴³⁾というサイトには、2614人の署名が集まっている。

この集めた署名は法務省などに送られることとなり、これが提出され法的に拘束された場合は、人形を作る人形師の減少等が生じ、やがて人形業界の衰退へとつながっていくのではないだろうか。これらは、人形愛好家だけでなく、それを批判する人間にとっても、不利益になることでしかない。

日本やアメリカ以外でも、児童人形の保持によって逮捕されることや、ラブドールを輸入したことによって逮捕される等、諸外国では単純所持でさえ規制されるなど、厳しい人形規制がなされている。

ここまで人形批判が注目されることになったのかを次項で述べる前に、ラブドールの扱いについて先に述べる。

人形性愛における意識と身体の関係性

ラブドールは、主に男性が擬似的な性交をするために作られた人形である。性行為をするためにラブドールは実物大の女性に近い形で作られている。ラブドールは基本的に擬似的な女性器がついており、触れた感触も人間に近い形で作られている。ラブドールの先駆けのダッチワイフは性行為のみを目的としていたが、ラブドールは性行為だけでなく、人形と人間が信頼関係を築くことも目的とした。そのため、単なる性処理道具ではなく、人間と人形が愛し合えることも考慮して作られている。さらに、ラブドールは企業によっては追加のオプションが豊富である等といったように、人形愛好家の求めているものがすべて詰まっている。

第2章の年表でも述べたように、近年に急速な発展を遂げた技術は、人形だけでなくラブドールにおいても発展した。

精巧に作られた人形達は、一般的に購入者の慰みものとなり、性差別を招く原因になるとして認識されている。

特に、ラブドールは一般的な人形やフィギュアなどよりも性的に見えてしまう。それは、性行為が可能であるだけでなく、人間の身体により近づいた感触や見た目からもよりも性的に見えてしまうのである。

球体関節人形の後に出てきたラブドールは、人形愛好家からも絶大な人気を誇っている。ラブドールは球体関節人形の派生としても扱われるため、一般的には両者は同義として捉えられている。その中で、人間が理想とする身体を持つ人形と性行為が出来るようになったという点において、ラブドールが人形愛好家から注目を集めているところであろう。

第3項 「人形愛」と「人間愛」の混在

前項で述べた人形批判というものは、一般的に人形に対しての認知がなされていないということが問題となっているとした。

ここで再確認するが、近代において球体関節人形の急速な普及によってもたらされた様々な問題は、澁澤の定義した球体関節人形に対する「人形愛」が一般的に認知されていないことによる。澁澤の定義した「人形愛」というものは「物体に対する嗜好」なのである。これは、生体ではなく物

体でないと成り立つことはないのである。そして、物体であり中身の無い空っぽの存在であるからこそ、人間は人形愛を認識する事が出来るのである。

現在の批判の多くは、幼児型ラブドールに対するものであった。人形愛と小児性愛の違いを述べることで「人形愛」と「人間愛」の違いを確認しよう。

人形性愛者と小児性愛者の間にある違いにおいて、一番気をつけなければならないのは、そもそもの目的が違うということであろう。

人形性愛者は、第一に物として人形を意識しており、主体性のない人形という物に対するの興味を持っているのであって、生きている児童に対して興味を持つことはない。その一方で、小児性愛者は生きている児童に対して興味を持っているのであり、その一方で児童のことをある種の物として扱い、一方的な意識の投射をし、コミュニケーションを取ることを考えず、一方的に蹂躪することを目的としている。

人形性愛者が小児性愛者として扱われている現状から抜け出すためには、この違いというものをしっかりと理解する必要がある。

人形批判の中でも、近年、一番問題視されている幼児型ラブドールは、これを所有する者は、人形だけでなく人間の児童に対してと同じように性的対象とみなしていると、第3項で記載したサイトなどで批判されている。

しかし、何度も言うようであるが、澁澤が述べたように澁澤やバルメールの流れを汲む者にとっては、人形はどこまでも物体であるため、人形と人間を同一に扱うことに彼らは同意できない。

このような中でも、現代で起こっている人形批判の中には、それを無視するかのごとく、児童人形やラブドールを愛する人間を異常者として扱い、それらを規制する動きを強めている。この傾向は今後も続いていくだろう。

なぜ人形師や企業が少女の形を模した人形を多く作る事となったのか。少女が人形に最も近い存在として認識されているからである。澁澤や金森も言うように、少女は社会的にも性的にも無知であり、さらに親の庇護下で匿われている自立をしていない存在なのである。⁽⁴⁴⁾ (これは少年にも当てはまる。) そして、人形自体も自ら自立せず、

何も語りださない無知な存在として扱われる。このことが人形師をして、少女の形を模した人形を作らせる理由であろう。

そのような中で近年、問題となっている幼児型ラブドールについて、ドールメーカーのTROTTLAの代表である高木氏は、自身の顧客達などが購入する際のドールの価格が1体約70万円以上になっているため、Business Journalにおいて、人形愛と小児性愛問題の関係について、次のように述べている。「それだけの金額を賄える同社の顧客は模範的な社会生活を送る善良な市民だと説明する。そして彼らは創作の世界で欲望の解消を求めているにすぎない」⁽⁴⁵⁾

高木氏が手がけるTROTTLAのドールに関しては「挿入」を目的とした性的な役割を果たす仕組みを持ってはおらず、愛でるための着せ替え人形としての役割を目的としている。その一方、「挿入」することはできないが、性行為ではないフェティシズムとしての性的要素は持っていることから、澁澤がいうような「人形愛」として具現している。

ピュグマリオン伝説においても、彫刻という物(オブジェ)に対して、ピュグマリオンが恋をしてしまうということからも、人形愛好家の持つものは「ヒトガタ」ではあるが人間ではない物に対しての欲情である。

おわりに

本論は、人形性愛が人間の対人形に対する意識と、それを投射する身体が密接な関係であると述べてきた。古くから存在する人形史の中で、現在の人形観は極めて特異なものとなりつつある。

その要因となっているのは、「人形愛」が急速に普及し、生きているかのように見える人形が数多く存在するようになったため、人形に対して起こる欲動が「物体愛」であると認識することが、うまく出来ていないのであらうと捉えた。現代の人形に対する欲動の「人形愛」と人間に対する欲動の「人間愛」の混在が、人形批判を引き起こしている原因である。

人形批判をする為には人形に対する理解が必要となってくる。人形のことを理解するためには、

表面的に人形を捉えるのではなく、本論で述べてきた人形が物であるとして捉える必要がある。これらは批判する人だけが認識するのではなく、双方が認識をする必要がある。批判をする人も人形を愛好する人も含め理解が得られない場合は、人形業界は崩壊するであらう。

球体関節人形の祖とされるハンス・ベルメールをはじめ、澁澤や金森など多くの人形愛好家・人形研究者などが、「人形愛」を生きていくためそして、死んでいくための欲動として考えたということ覚えておく必要がある。

今も人形が作られ、人形が愛好されるのは、人間の一度しかない生を探求するためなのかも知れない。

【注】

- (1) フランスの哲学者
- (2) ロシアの伝統的な人形
- (3) スペイン・ポルトガルに伝わる伝統的な人形
- (4) 人形の関節部が球体になっている物
- (5) 「球体関節人形の設計図」"<http://www.aimidoll.com/sakuzu.html>" (閲覧日 2020年9月18日) 球体関節人形は人形内部に紐や糸が通っており、一般的に頭から足が繋がっているものと両手を通したもの、二本で縦と横を組み立てている。
- (6) 澁澤龍彦 1985年『少女コレクション序説』p24 中公文庫
- (7) 同上 p19
- (8) 同上 p24
- (9) モーリス・メルロ＝ポンティ 訳, 小木貞孝, 竹内芳郎 1967年「知覚の現象学1」みすず書房 p145
- (10) 同上 p245
- (11) 『幽』2016年 25号「[人形／ヒトガタ] 中川多理 人形は鏡、自分をそのまま反射する。」p40
- (12) 『幽』2016年 25号「[人形／ヒトガタ] 綾辻行人 球体関節人形の魅力 p28
- (13) 田中圭子 2008年「日本における球体関節人形の系譜」『同志社大学人文科学研究所』社会科学 80号 p45

人形性愛における意識と身体の関係性

- (14) ドイツのシュールレアリストで人形作家や画家などを手がける。澁澤龍彦『少女コレクション序説』1985年 中公文庫 p111～114や田中圭子「日本における球体関節人形の系譜」『同志社大学人文科学研究所』社会科学 80号 2008年 p47～49等で述べられている。
- (15) ハンス・ベルメール作「La Poupée」1939年「アートペディア ハンス・ベルメール」<https://www.artpedia.asia/hans-bellmer/>（閲覧日 2020年12月23日）
- (16) 田中圭子 2008年「日本における球体関節人形の系譜」『同志社大学人文科学研究所』社会科学 80号 p45
- (17) 同誌 p46
- (18) 同誌 p47
- (19) 同誌 50
- (20) 7に同じ 46
- (21) 一般的にはガラス繊維とポリエステル樹脂の組み合わせによって作られた強化プラスチック。yutakasangyo.co.jp（閲覧日 2020年12月21日）
- (22) 12に同じ p49
- (23) 12に同じ p53, 54
- (24) 「日本臓器移植研究会 日本の臓器移植の歴史」<http://www.jsht.jp/transplant/>（閲覧日 2020年12月14日）
- (25) 「オリエント工業の歴史」<https://www.orient-doll.com/company/history/>（閲覧日 2020年5月23日）
- (26) 金森修 2018年『人形論』平凡社 p140～142
- (27) 同上 p137～140
- (28) 「kaikai kiki gallaery」http://gallery-kaikaikiki.com/category/artists/takashi-murakami/works_takashi_murakami/（閲覧日 2020年12月14日）
- (29) 同上
- (30) 「ボークス公式ドルフィー ドルフィーとは？」<http://dolfie.volks.co.jp/about/>（閲覧日 2020年12月23日）
- (31) 36に同じ p142～150
- (32) 「シリコーンゴム共和工業(株)」<http://www.kyowakg.com/quality/what/>（閲覧日 2020年12月25日）
- (33) 「四谷シモン人形館 淡翁荘」<https://kamadamuseum.jp/doll>（閲覧日 2020年5月23日）
- (34) 「Change.org」<https://www.change.org/p/ban-child-sex-dolls-that-encourage-child-sex-abuse-banchildsexdolls>（閲覧日 2020年12月23日）
- (35) 「オリエント工業の歴史」<https://www.orient-doll.com/company/history/>（閲覧日 2020年5月23日）
- (36) 日本の美術評論家「東京文化財研究所」<https://www.tobunken.go.jp/materials/bukko/9776.html>（閲覧日 2020年10月14日）
- (37) 澁澤龍彦 1985年『少女コレクション序説』中公文庫 p12
- (38) 同上 p13
- (39) 同上 p11
- (40) モーリス・メルロ＝ポンティ 訳、小木貞孝、竹内芳郎 1967年「知覚の現象学1」みすず書房 p145
- (41) 田中雅一 2017年 侵犯する身体と切断するまなざし『フェティシズム研究3 審判する身体』田中雅一編 京都大学学術出版 p21
- (42) 金森修 2018年「人形論」平凡社 p134
- (43) 「Charge.org 幼児型セックスドールの生産・販売・の廃止を求めます。」https://www.change.org/p/%E6%B3%95%E5%8B%99%E7%9C%81%E5%B9%BC%E5%85%90%E5%9E%8B%E3%82%BB%E3%83%83%E3%82%AF%E3%82%B9%E3%83%89%E3%83%BC%E3%83%AB%E3%81%AE%E7%94%9F%E7%94%A3%E8%B2%A9%E5%A3%B2%E3%81%AE%E5%BB%83%E6%AD%A2%E3%82%92%E6%B1%82%E3%82%81%E3%81%BE%E3%81%99?utm_content=cl_sharecopy_22244407_es419%3Av2&recruiter=1090861143&utm_source=share_petition&utm_medium=copylink&utm_campaign=share_petition&utm_term=share_petition（閲覧日 2020年12月23日）
- (44) 澁澤龍彦 1985年『少女コレクション序説』中公文庫 p13
- (45) 『Business Journal 「子供のラブドール」の世界的メーカー社長が、世間の誤解に反論

…「最高のものをつくりたい」』https://biz-journal.jp/2017/03/post_18382.html/amp (閲覧日 2020年12月23日)

参考文献 参考サイト

田中圭子 2008年「日本における球体関節人形の系譜」『同志社大学人文科学研究所』社会科学 80号 43-58項

山崎明子 2018年「〈妊婦〉アート論 孕む体を奪取する」青弓社

金森修 2018年「人形論」平凡社

亀井秀雄「身体・表現のはじまり」1982年 れんが書房新社

藤田博士 2006年「人形愛の精神分析」青土社
「KOSTNIC TARI NAKAGAWA DOLL SITE」
<https://www.kostnice.net/> (閲覧日 2020年11月7日)

澁澤龍彦 1985年「少女コレクション序説」中公文庫

澁澤龍彦 1974年「人形愛序説」第三文明社

小倉千加子 2001年「セクシャリティの心理学」有斐閣

青木恵理子 2009年「親密性と身体」田中雅一編『フェティシズム研究1 フェティシズム論の系譜と展望』京都大学学術出版会 p319

岡崎文明、日下部吉信、他 1994年「西洋哲学史 - 理性と運命の可能性 -」昭和堂

田中雅一編 2017年「フェティシズム研究3 侵犯する身体」

モーリス・メルロ＝ポンティ 訳、小木貞孝、竹内芳郎 1967年「知覚の現象学1」みすず書房

モーリス・メルロ＝ポンティ 訳 宮本忠雄、小木貞孝、木田元、竹内芳郎 1967年「知覚の現象学2」みすず書房

霜田求 2018年「テキストブック 生命倫理 霜田求編」法律文化社

「中原淳一 official website」<https://www.junichinakahara.com/profile> (閲覧日 2019年12月19日)

「公益財団法人 竹久夢二 伊香保記念館」http://yumeji.or.jp/about_yumeji.html (閲覧日 2019年10月22日)

吉田良 2001年「アストラル・ドール—吉田良 少女人形写真集」アスペクト

「DOLL SPACE PYGMALION」<https://www.kostnice.net/> (閲覧日 2020年8月20日)

「オリエント工業ホームページ」<https://www.orient-doll.com/> (閲覧日 2020年5月26日)

「オリエント工業の歴史」<https://www.orient-doll.com/company/history/> (閲覧日 2020年5月23日)

「日本臓器移植研究会 日本の臓器移植の歴史」<http://www.jsht.jp/transplant/> (閲覧日 2020年12月14日)

鷺田清一 1996年「モードの迷宮」ちくま文芸文庫

田中雅一編 2014年「フェティシズム研究2 超越するモノ」